

さいたま 埋文 レポート

2022
年報 42



「あいさつ」

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団は、埼玉県の出資により昭和55年に設立された法人です。

当時、本部事務所は浦和市（現さいたま市）にありましたが、昭和62年に大里地域に整理事務所を開設し、一部の業務と職員が移転、以来今年で35年が経過します。その後、平成2年には本部事務所全体が現在地に移転しています。

昭和62年当時の行政区域であった大里郡大里村は、その後の町制施行により平成14年に大里町となりました。あまり知られてはいませんが、大里町への町制施行は、村単独の町制施行としては全国最後とのことでした。

現在、大里町は熊谷市に編入されています。熊谷市と聞くとたいへん暑い地域だと思われるがちですが、大里地域は比企丘陵と荒川に挟まれた、空がとっても広く緑豊かな場所です。風の爽やかな穏やかなところです。

当事業団は、ここ大里地域の皆様に35年の間支えられながら、埼玉県の文化遺産の発掘調査に尽力して参りました。地域の皆様の長年にわたるご支援に心から感謝を申し上げます。

当事業団は、県内各地域で遺跡の発掘調査を行っていますが、ここ大里地域の本部事務所では、日々100人ほどの職員が、発掘した遺物の整理や記録、保存作業等にあたっています。ここで保存処理した土器などの一部は、臨時に実施する見学会のほか、施設内の展示コーナーでご覧いただくことができますので、近くにお寄りの際などに足をお運びいただければと思います。

社会経済における無形化・非物質化の重要性が指摘されますが、前に進もうとするとき、後ろを振り返る必要を感じることもあるでしょう。数千年、数百年と遺されてきた有形の「物」には、過去からの未来へのメッセージが込められています。私たち埼玉県埋蔵文化財調査事業団の目的である、過去からの「物」を保存し、あるいは記録して、後世に残していくことは、未来に向かって進もうとする人の役に立つ仕事だと信じて、これからも一層努力して参ります。

さて、令和三年度は、10遺跡で発掘調査を行いました。

今回が第3次の調査となる北2丁目陣屋跡遺跡（久喜市）では、遷座前の旧八坂神社の跡から、大規模な盛土の造成、本殿や拝殿の基礎などが検出されました。さらに文字や人物名などが記された石灯籠や石碑も発見され、江戸時代後期の栗橋宿の繁栄が偲ばれる貴重な成果が得られました。

また、平右衛門遺跡（鴻巣市）の第3次調査では、旧石器時代のナイフや縄文時代の土器のほか、古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡などが検出され、今後、集落の数世紀にわたる変遷の様相がより明らかになっていくことが期待されます。

整理事業については、発掘調査を終えた遺跡11件を行い、そのうち8件を報告書にまとめ刊行しました。このうち、北大竹遺跡（行田市）については、新聞・テレビなどで調査状況の発表を行い、遺物の見学会を実施しました。古墳時代から飛鳥時代に及ぶ大量の土器や石器、さらに国内最多出土量を誇る子持勾玉など祭祀遺物の出土状況などについて、詳しく報告書に記載しましたので、そちらも一読いただきたいと思っております。

埋蔵文化財に関する普及事業では、小学生を主な対象とした学習支援を小学校40校で実施しました。「古代から教室へのメッセージ」と称するこの事業は、当事業団職員が学校の授業等に向かい、実物の土器や石器に子どもたちが直接触れる機会を提供するものであり、各学校から好評をいただいております。

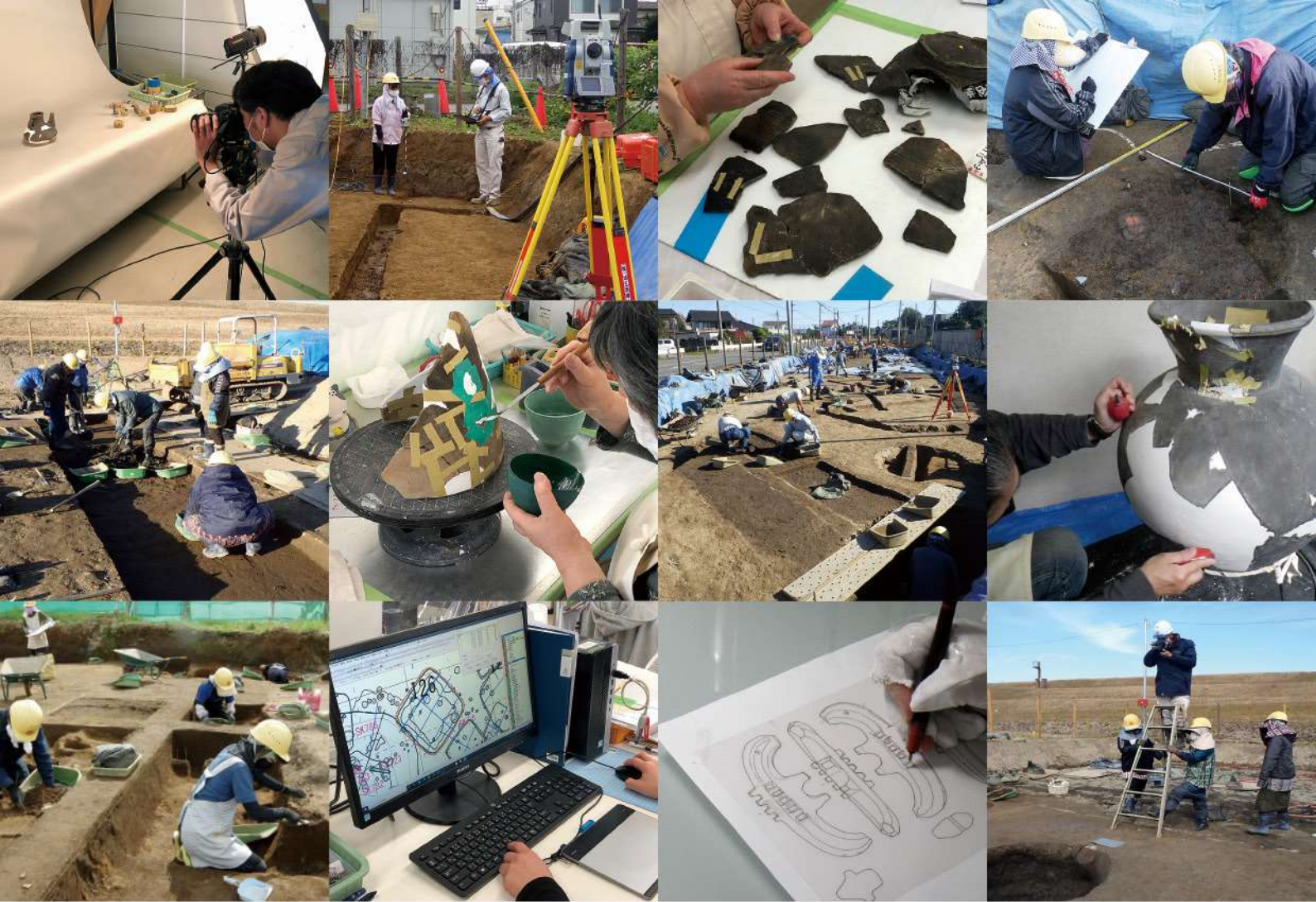
このほか、発掘調査の成果をいち早く公開する「遺跡見学会」、大型商業施設などにおいて展示を行う「ほるたま展」などを実施し、多くの方々にご来場いただきました。いずれも新型コロナウイルスの感染予防に留意しながらの開催となり、ご協力いただきました皆様には、心よりお礼申し上げます。

さらには、博物館や市町村で実施される各種講座への職員派遣や大学生対象のインターンシップなど、文化財保護に係る普及啓発、人材育成支援にも取り組んでいるところです。本書は、当事業団が令和三年度に実施しました事業の概要をわかりやすくまとめたものです。多くの皆様に、研究や学びの参考としてご利用いただけましたら幸いです。

令和四年八月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 依田 英樹



目次

I 令和三年度に調査をした遺跡

北2丁目陣屋跡(第3次)	久喜市	1
立野遺跡(第1次)	行田市	3
船川遺跡(第1次)	行田市	4
平右衛門遺跡(第3次)	鴻巣市	5
宮前遺跡(第1次)	鴻巣市	9
上宿遺跡(第2地点)	志木市	11
三ノ耕地遺跡(第4次)	吉見町	12
富田庚申塚遺跡(第8次)	寄居町	14
越谷警察署前遺跡(第1次)	越谷市	15
東本庄遺跡(C地点I次)	本庄市	16

II 令和三年度に刊行された報告書

		17
--	--	----

III 発掘資料の保存と活用

1 保存・活用事業(埼玉県収蔵埋蔵文化財保存活用業務委託事業)	18
2 その他の事業	20

IV 事業団の概要

1 設立の趣旨と目的	23
2 略沿革	23
3 組織の概要	23

北2丁目陣屋跡 (第3次) 久喜市



八坂神社境内

「立地と環境」

北2丁目陣屋跡は、JR宇都宮線・東武日光線栗橋駅から東北へ約0.8kmの久喜市栗橋北二丁目地内に所在する。利根川が遺跡の東側を南流しており、標高は約11mである。

遺跡が所在する栗橋地区は、中川低地北部に位置し、表層地質はすべて沖積土である。地区には河畔砂丘や自然堤防などの微高地が形成され、その周囲には後背湿地や旧流路跡などが広がっている。

江戸幕府は、江戸を水害から守ることを主な目的として、利根川の東遷工事を行った。その過程で元栗橋(現在の茨城県猿島郡五霞町)から現在の栗橋へ日光道中(街道)の渡河点を移し、ここに関所を設けた。これが『新編武蔵風土記稿』に「房川渡中田御関所」と記された栗橋関所である。元栗橋から移住した池田鴨之助ら54戸の住民に、幕府は宿場の整備をさせ、元和9年(1623)頃には、「新栗橋」と称される街並みができあがった。以後、栗橋宿は交

通の要衝として繁栄し、街道の両側に400余の家々が建ち並ぶまでとなった。

宿の北端には八坂神社(牛頭天王社)が鎮座した。街道はその手前で利根川方向に直角に折れ、利根川堤外の関所へと通じていた。調査区はこの八坂神社の境内にあたる。調査区

また八坂神社は、国土交通省による首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴い、令和2年、さらに北側の新堤防上に遷座した。



本殿・拝殿基礎

「発見された遺構」

北2丁目陣屋跡第3次調査では、本殿跡1棟、拝殿跡1棟、鳥居跡1基、境内社跡4棟、石造物基礎跡6基、土壇3基等が旧八坂神社の社殿盛土上から検出された。このほか、境内の社殿盛土周囲から、井戸跡1基、溝跡1条、柵列1条、遺物包含層1箇所が検出された。

「盛土の調査」

遷座前の八坂神社は、鳥居をくぐって参道を進むと石段となり、それを上がった小高い場所に本殿や拝殿境内社などが並び建っていた。今回の調査でこの高まり(盛土)を断ち割ったところ、盛土はわずかに傾斜する砂層の上に構築されていたことが明らかになった。傾斜は、北側に向かうにつれて高くなっていた。盛土の高さは約1.5mであり、本殿から参道の続く南側に

- 所在地
久喜市栗橋北二丁目3405-1他
- 実施期間(事業者)
令和3年4月~令和4年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
2,528.42㎡
- 遺跡の種類
陣屋跡
- 主な遺構
江戸(本殿跡1・拝殿跡1・鳥居跡1・境内社跡4・石造物基礎跡6・土壇3・井戸跡1・溝跡1・柵列1・遺物包含層1)

I 令和三年度に調査をした遺跡



ろうそく石地業（本殿）



ろうそく石地業（拝殿）

向けて土が積み上げられていた。
本殿の地業は、南北6m×東西4mで長方形の総地業、拝殿は、南北6.5m×東西9.7m、幅2mの「口」の字形に廻る布堀地業であり、内部は砂利と土を交互に突き固めていた。また、柱が立つ場所には、切石や大きな河原石、砕いた石を据えていた。この石の中には、石碑の再利用品が混じっていた。砂利と土を交互に突き固めた層は、本殿、拝殿とも40層以上あり、その深さは2.5mにも達していた。盛土の表面は、固く締まっていたが、盛土の内部は柔らかく、突き固められていなかった。
本殿と拝殿の地業は同一の工法（ろうそく石地業）を採用しているばかりでなく、石材の質、規格、組み方で統一されていた。
このほか石段の上には、明和3年（1766）

銘の石造りの鳥居跡が1基検出された。鳥居の地業は、重量を支えるため複雑な石組みが施されていた。また、社殿の周囲には、4基の境内社（小祠）跡が点在していた。このうち参道の西側に、2基の境内社跡が並んで配置されていた。これらの境内社跡は、布堀の中に大きめの河原石を置き、その下を土と砂利で互層に突き固めていた。拝殿の手前には、石灯籠と考えられる石造物の基礎が6基検出された。
本殿へと至る石段とその両側に築かれた石垣内には、文政元年（1818）に奉納された石灯籠の一部が、裏込めとして用いられていた。この石灯籠には、栗橋町内の「板屋」「伊豆屋」といった商家名が刻まれていた。
さらに、社殿盛土の北西裾部には破砕した玉垣が発見された。これは、盛土の崩落を防ぐた

めに、土留めとして用いたと考えられる。
「境内（盛土部分以外）の調査」
現地表面から約50〜80cm下に灰褐色砂質土が検出された。この層は、調査区の北西から南東に向かって緩やかに傾斜していた。
盛土裾の西側に溝跡が、1条検出された。この溝は、社殿に並行して北西から南東方向へ延び、長さは約20mである。さらに、この溝跡に沿うように方形の柱穴が、等間隔に並んでいた。溝と柱穴は、盛土裾に作られたことから、境内を区画する施設と考えられる。
調査区南側には、井戸跡を検出した。この井戸は、掘り方の底に4枚の板材を敷き詰め、その上に陶製の井筒を設置していた。この井戸は、その位置から見て、手水舎の跡と考えられる。
このほか調査区の西側に遺物包含層が検出された。第2次調査で検出された遺物包含層の続きである。包含層中から、陶磁器、土器、瓦、木製品、金属製品、石製品などが多量に出土した。包含層の形成時期は、江戸時代末から明治時代前半期であった。遺物は、圧倒的多数が日常雑器であり、神社の境内でありながらも、信仰関係の遺物は出土しなかった。

「まとめ」

調査は、八坂神社境内を対象に実施した。
調査により、八坂神社跡から大規模な盛土の造成、本殿や拝

殿の地業が検出された。複雑な構造と優れた技術、石灯籠や石碑に記された文字や人物名などが明らかになるなど、数多くの貴重な成果が得られた。そこからは、鎮守八坂神社（牛頭天王社）に対する人々の篤い信仰心はもとより、栗橋宿の経済力の高さをはつきりと窺うことができる。
社殿建立は、これまでに古文書、棟札などに記録があったが、礎石に再利用された石碑に年号がみられたことから、嘉永年間（1848〜1854）以降と考えられる。しかし、社殿の盛土の造成開始と陣屋跡の関係、さらにより古い社殿の有無は明らかにできなかった。



石灯籠転用状況

たての 立野遺跡（第1次） 行田市

「立地と環境」

立野遺跡は、利根川水系に含まれる福川の右岸に位置し、利根川との合流地点から約500m上流の行田市大字北河原1491-1他に所在する。妻沼低地から加須低地にかけて広がる沖積地の利根川沿いに分布する、自然堤防上に立地する。

遺跡の東側には酒巻古墳群が隣接している。酒巻古墳群は、6世紀前半から7世紀前半頃の古墳時代後期に築造された。最西端に位置する酒巻14号墳は、6世紀末に築造された円墳で、埴輪を含む出土品が一括して国の重要文化財に指定されている。

「発見された遺構」

立野遺跡第1次調査では、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構が発見された。

調査区は、利根川の上流側と下流側に分かれており、便宜上上流側をA区、下流側をB区とした。また、A区は便宜上西側からA-1区、A-2区、A-3区とした。各時代の概要は以下のとおりである。

縄文時代

B区でピット9基と、縄文時代後期の遺物包含層1箇所が確認された。確認面は青灰色粘土層と黄橙色粘土層の境で、土器片や、石鏃などの石器が出土した。

古墳時代

B区の西側で方形周溝墓1基が確認された。南西コーナー部が、調査区域外にかかる。盛土部分は削平されていた。

方台部は比較的形の整った方形で、東西長10m、南北長10・6mである。主体部は認められなかった。時期は、出土した土師器製の口縁部の形態的な特徴から、古墳時代前期後半と考えられる。

平安時代

A-1区で平安時代の遺物包含層1箇所と土壇5基が確認された。下流側のB区では、平安時代の竪穴住居跡2軒、土壇1基、溝跡1条が確認された。

A-1区の遺物包含層からは、土師器、須恵器、灰釉陶器片、緑釉陶器片が検出された。

B区では、調査区中央の北寄りに第1号住居跡、調査区南西部に第2号住居跡が確認された。

第1号住居跡の規模は、長軸長3・5m、短軸長2・2mである。カマドは、北西壁の北コーナーに設けられていた。遺物は、土師器製の破片が出土した。

第2号住居跡の規模は、長軸3・2m、短軸2・6mである。東壁中央に設けられたカマドは、煙道部が長く延びるタイプで、煙道部先端の煙出し部には、土師器製の口縁部から肩部までの破片が正位に埋設されていた。遺物は、須恵器・甕、土師器製などが出土した。

第3号土壇は、調査区中央南寄りの調査区際から検出された。覆土に大量の焼土ブロックを含み、底面に被熱痕が確認された。焼成土壇と推定されるが、構造は明確にできなかった。

中・近世

A区から井戸跡3基、溝跡1条が確認された。井戸跡3基はA-2区で確認され、いずれも直径が1・5m以上で円筒状に掘り込まれた素掘りの井戸である。

第2号溝跡は、A-2区からA-3区にかけて、北西方向から南東方向に直線的に掘削されていた。A-3区では、両岸に木杭を打ち込んだ、しがらみ状の遺構が認められた。覆土中から近世陶磁器の破片や貝殻などが出土した。

「まとめ」

立野遺跡第1次では、古墳時代、奈良・平安

- 所在地
行田市大字北河原1491-1他
- 実施期間(事業者)
令和3年4月～令和3年12月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
4,208.13㎡
- 遺跡の種類別
集落跡
- 主な遺構
縄文(ピット9・遺物包含層1)
古墳(方形周溝墓1)
平安(住居跡2・土壇6・溝跡1・遺物包含層1)
中・近世(井戸跡3・溝跡1)
時期不明(土壇4)

時代、中・近世の遺構・遺物を確認した。また、少量だが縄文時代の土器、石器も出土した。

古墳時代は、方形周溝墓が1基確認された。方形周溝墓は、通常2〜3基を1群として構成されており、周辺に数基の方形周溝墓が存在すると考えられる。

平安時代では、竪穴住居跡2軒がB区から検出された。時期は第1号住居跡が9世紀後半から10世紀前半、第2号住居跡が9世紀後半である。また、焼成土壇と考えられる土壇がB区で検出された。A区では東から西へ緩やかに傾斜する遺物包含層が確認された。

中・近世の遺構はA区で検出され、第2号溝跡には両側に木杭を打ち込んだしがらみ状の遺構が認められた。



遺跡全景



方形周溝墓



調査区全景（西から）

「立地と環境」

船川遺跡は、利根川右岸に位置し、行田市大字須加に所在する。妻沼低地から加須低地にかけて広がる沖積地のうち、利根川右岸の自然堤防上に立地する。

遺跡の周辺では、遺跡南側には大稻荷古墳群がある。直径約20mの浅間塚古墳が現存しているが、多くの古墳は開墾などにより削平された。昭和44年に2基の古墳が調査され、大稻荷1号墳は、直径26mの円墳で、円筒埴輪列が径

ふながわ
船川遺跡（第1次）
行田市

約24mの弧を描いて出土し、6世紀初頭の築造とされている。2号墳は、1号墳の東南57m、水田面より0.2m下から石室とみられる細長い礫群が検出された。この礫群の中から大刀、鉄鏃、刀子、轡が出土し、5世紀末の築造とされている。

遺跡が所在する「須加」の地名は、19世紀中ごろまでは「須賀」の字が、それ以降は現在と同じ「須加」の字が用いられることが多い。遺跡東側の長光寺、須加小学校付近には、須加城があったとされている。永享12年（1440）の結城合戦の際に足利持氏の家臣である一色伊予守は、成田館に立て籠もり、須賀土佐入道の「宿城」に押し寄せ、須賀の郎党が討ち死にしたと『鎌倉九代後期』や『鎌倉大草紙』に記されている。この「宿城」が須加城とされている。現在、城の遺構は確認されていない。長光寺が慶安4年（1593）の開基とされていることから、この時期までに城はなくなっていたと考えられる。

「発見された遺構」

調査では、上層（第一面）と下層（第二面）に遺構が検出された。第一面は概ね中世から近世、第二面は古墳時代から中世と考えられる。第一面と第二面の標高差は約0.3mである。

第一面（中世・近世）

土壇1基、井戸跡1基、火葬跡1基が検出された。火葬跡は調査区北側の壁際で、一部が排水用側溝に壊されていた。形状は、焼成部と直

交するように煙道部が取り付くT字状で、煙道部は西側を向いている。焼成部は0.9×0.3m、深さ0.4mで、煙道部は先端に向かつて浅くなっている。焼成部と煙道部の接点付近の壁は非常によく焼けて焼土化していた。中世の所産と考えられる。

第二面（古墳時代〜中世）

古墳時代の土壇3基、ビット1基、奈良・平安時代の土壇1基、中世の土壇1基、井戸跡2基、時期不明の土壇1基、溝跡1条、ビット12基が検出された。

第3号土壇は、平面形が1.5×0.8mの歪



第1号火葬跡

- 所在地
行田市大字須加 4464-1 他
- 実施期間(事業者)
令和3年12月～令和4年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
620.80㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
第一面 中世(火葬跡1)
近世(土壇1・井戸跡1)
第二面 古墳(土壇3・ビット1)
奈良・平安(土壇1)
中世(土壇1・井戸跡2)
時期不明(土壇1・溝跡1・ビット12)

「まとめ」

第一面では、中世から近世の遺構が検出された。このうち、中世の火葬跡が確認されたことは、地域の当該時期を考えるうえで貴重な発見と言える。

また、第二面では古墳時代や平安時代の遺構が検出された。現在のところ遺跡周辺では、集落遺跡が確認されておらず、集落の存在を考える上で重要な発見となった。

んだ楕円形で、深さは0.1mである。埋土中に焼土塊が、その下層に炭化物が検出された。僅かに古墳時代後期の土師器小片が出土した。第4号土壇は、平面形が0.8×0.5mの歪んだ円形で、埋土に炭化物が多く見られた。出土遺物はなかったが、中世の所産と判断した。第5号土壇は、平面形が1mの円形で、深さは0.2mである。古墳時代後期の高坏脚部や、甕胴部等の土師器片が出土した。第7号土壇は、平面形が0.8×0.7mの歪んだ円形で、深さは0.3mである。土師器小片と平安時代の須恵器片が出土した。

2基の井戸跡からは、陶磁器、土師器、須恵器の破片が少量出土した。

へいえもん 平右衛門遺跡(第3次) 鴻巣市

「立地と環境」

平右衛門遺跡は、鴻巣市箕田に所在する。標高約16mの大宮台地上の遺跡である。遺跡の所在する大宮台地は、遺跡周辺では北西方向へ半島状に延びており、東側は元荒川が、また西側は荒川が南東方向へ流れている。

平右衛門遺跡の周辺は、古墳時代になると遺跡数は急激に増加し、宮前本田遺跡、大間原遺

跡、馬室小校庭内遺跡、赤台遺跡、新屋敷遺跡、中三谷遺跡等で前期の集落が確認できる。古墳は後期になって箕田古墳群や新屋敷遺跡等で大規模な古墳群が形成された。また、生田塚遺跡や馬室埴輪窯跡では埴輪窯が開窯された。生田塚遺跡は住居跡、埴輪窯跡、工房跡、粘土採掘坑等も確認された工人集落である。製作された埴輪は、周辺の埼玉古墳群や笠原古墳群に供給されたことが明らかになっている。

奈良・平安時代では、遺跡数が減少する。古墳時代の集落は、宮前本田遺跡や赤台遺跡、中三谷遺跡等で継続が認められる。赤台遺跡では8世紀前半の竪穴住居跡が検出された。

中・近世の遺跡としては、城館跡として箕田地区の箕田館跡や糠田地区の安達館跡のほか、大間地区の源経基館跡等が知られている。箕田館跡推定地である九右衛門遺跡では、詳細な時期は不明だが、大型の堀跡が見つかり、中世の陶磁器類が多量に出土した。また、中三谷遺跡ではコの字状に巡る堀跡が、新屋敷遺跡では二重の堀跡が検出され、中世の館跡と推定された。このほか、平右衛門遺跡に近い宮前本田遺跡で、検出され

第11地点 全景



た掘立柱建物跡や井戸跡、地下式塙や溝跡から、周辺に館跡の存在が推定されている。

「発見された遺構」

平右衛門遺跡からは、令和2年度と同様に古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構群が発見された。

調査区は北側の緩やかな谷地形に向かう微高地の端部に位置している。第11地点から第15地点の5地点に分かれるが、いずれも近接している。



調査区位置図

遺構は、古墳時代の竪穴住居跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡、土塙、井戸跡、溝跡、中・近世の竪穴状遺構、土塙、井戸跡、溝跡などが発見された。各時代の概要は以下のとおりである。

古墳時代
竪穴住居跡が6軒検出された。

第15地点第3号住居跡は、調査区南側で検出した。南側壁の大半は第7号溝跡によって、南西コーナーは攪乱によってそれぞれ破壊されている。平面形は方形である。遺物は土師器片等が少量出土した。カマドは灰褐色粘土によるソデ(袖)が残存していた。煙道は残存していない。4本柱とみられ、3本分検出されたが南東側のは第7号溝跡によって破壊されており、確認できなかった。また、南東側柱穴は攪乱によって上部の大半を破壊されている状態で

- 所在地
鴻巣市大字箕田3625-1番地
他
 - 実施期間(事業者)
令和3年4月～令和4年3月
(国土交通省関東地方整備局)
 - 調査面積
5,000㎡
 - 遺跡の種類
集落跡
 - 主な遺構
- 第11地点
奈良・平安(住居跡3・土塙3・井戸跡3・溝跡2)、中・近世(土塙9・井戸跡1・溝跡7)、時期不明(土塙1・ピット69)
- 第12地点
古墳(住居跡2)、奈良・平安(住居跡4)、中・近世(土塙122・井戸跡8・溝跡20)、時期不明(ピット403)
- 第13地点
古墳(住居跡1)、奈良・平安(住居跡4)、中・近世(土塙141・井戸跡7・溝跡13)、時期不明(ピット391)
- 第14地点
奈良・平安(住居跡2)、中・近世(竪穴状遺構1・土塙56・井戸跡5・溝跡12)、時期不明(ピット152)
- 第15地点
古墳(住居跡3)、奈良・平安(住居跡3)、中・近世(土塙21・井戸跡4・溝跡9)、時期不明(ピット43)

I 令和三年度に調査をした遺跡



第11地点 第2号住居跡 カマド遺物出土状況



第11地点 第2号住居跡

第11地点第3号住居跡は、調査区北西端で検出された。南西隅および北東隅が調査区外となる。形状は隅丸方形で、規模は推定一辺5.5m、深さ0.4mである。遺物は覆土全体から須恵器環・坏蓋、土師器環、甕などが出土した。カマドは北壁中央に設けられ、灰白色粘土による

半頃と考えられる。第11地点第2号住居跡は、調査区南東端で検出された。南西隅部分は調査区外にあり北西隅部分は攪乱の影響を受けている。形状は方形である。カマドは北壁の中央やや東よりに設けられ、灰白色粘土によるソデの一部が残存していた。カマド燃焼部から焚口にあたるところから、土師器甕と甑がつぶれた状態で出土し、ソデの左脇から須恵器小型壺が、右脇から須恵器坏蓋が出土した。燃焼部内からは、脚部が欠けた台付甕が横転して出土した。柱穴は4基検出された。南壁中央には入り口施設に関連するピットが検出された。カマドの右脇からは、貯蔵穴と考えられる楕円形の土壇が検出された。直上から完形の土師器環が出土した。時期は8世紀前半頃と考えられる。

あった。奈良・平安時代
竪穴住居跡を16軒検出した。
第11地点第1号住居跡は、調査区中央部近くで検出された。南西の半分が調査区外にあり、北西隅部分は攪乱によって失われていた。形状は方形である。南東隅寄りにカマドが設置され、柱穴は中央部付近に3基検出された。遺物はカマドとその周辺部からまとまって出土した。須恵器環や土師器甕・坏などがある。カマドは灰白色粘土によるソデの一部と、煙道の天井部が残存していた。時期は8世紀後半頃と考えられる。

ソデの一部が残存していた。カマドから土師器甕などの遺物が少量出土した。柱穴は、中央の1基を含め5基検出された。南壁中央からは入り口施設に関連するピットが検出された。時期は8世紀前半頃と考えられる。



第12地点 全景

第15地点第1号住居跡は、調査区北西隅で検出した。西側壁は近世の土壇によって破壊

は、出入口施設に関連するピットが検出された。第15地点第2号住居跡は、調査区中央付近で検出された。南東壁一部分を近世の溝跡によって、北西壁の一部は土壇によって破壊されていた。形状は方形である。出土遺物はカマドおよびその周辺から土師器甕破片がまとまって出土し、わずかであるが須恵器環の破片も出土した。

されていた。形状は方形である。遺物は土師器甕などが出土した。カマドは北壁中央よりやや東に偏って検出された。灰褐色粘土によるソデが残存しており、向かって右側のソデには構築材として土師器甕が用いられていた。同左側のソデにも丸く欠けたようなところがあったことから、同じように構築材があったと考えられる。煙道は残存していない。壁溝は明確で、住居内をほぼ1周していたとみられるが、中近世の土壇によって部分的に破壊されていた。南側壁付近の床面



第13地点 全景

第15地点第4号住居跡は、調査区北東端で検出された。中近世の第1号溝跡が中央部を斜めに横切るように北東―南東方向に走っている。北東コーナーが調査区外にあり、南東コーナーは攪乱により破壊されている。形状は方形である。出土遺物は土師器坏、甕などが散漫に出土した。カマドは北壁中央よりもやや東寄りに設けられ、ソデの一部も残存して

おり良好な状態であった。

カマドから土師器甕などの遺物が少量出土した。柱穴は4本である。南西側の柱穴は径が大きく、抜き跡と考えられる。

土壌は調査区中央付近から3基検出された。第5号土壌は約1m四方、深さ0.5mで、上面を方形に下面を円形に掘り込まれていた。覆土中より土師器甕の一部が出土した。

カマドは北壁の中央に設けられ、灰褐色粘土によるソデも残存しており良好な状態であった。また、西壁中央には旧カマドとみられる部分が確認された。こちらにはソデは存在しなかった。燃焼部の上部には土師器甕の半分がつぶれた状態で出土し、焚口部には粉々に割れた状態の土師器甕が出土した。柱穴は明瞭で、4本検出された。



第13地点 第2号溝跡

井戸跡は3基検出された。規模は直径1m以下で漏斗状に掘り込まれていた。第4号井戸跡からは土師器坏、甕の破片が少量出土した。溝跡は2条検出された。第2号溝跡は調査区中央を南西から北東方向へ走行していた。規模は、幅1m、深さ0.2から0.5mである。
中・近世
竪穴状遺構1基、土壌349基、井戸跡25基、溝跡61条を検出した。
竪穴状遺構は第14地点南側から発見された。深さ約40cmの方形で、大半は調査区外にあるとみられる。遺物は少量の陶磁器片が出土した。土壌は各調査区で検出され、特に第12地点と第13地点に多く分布していた。平面形は長方形



第13地点 第2号溝跡出土 石臼

I 令和三年度に調査をした遺跡



第14地点 全景

この溝跡と接続すると考えられる同規模の第15地点第7号溝跡の走行方向は南西―北東で、南西側調査区外の地点でほぼ直角に曲がり、第11地点第7号溝跡に繋がると考えられる。

第13地点第2号溝跡は、深さ1.7から1.8mの大溝で、底面は平坦である。溝跡からは、石臼下のうす部分

を主体とするが、楕円形も存在する。規模は大様々である。第11地点第8、10号土壇、第15地点の第16号土壇など、一部では埋め戻された状況が見られた。

井戸跡のうち、第11地点第3号井戸跡の規模は直径1.5mで、筒形に掘り込まれていた。覆土からは中世陶磁器や片岩などが少量出土した。また、第15地点第3号井戸跡など、径が小さい井戸跡も発見された。



第15地点 全景

溝跡のうち、第11地点第7号溝跡は規模が幅4.4から4.8m、深さ約1.7から1.8mの大溝である。断面の形状は箱薬研形である。覆土中層より中世陶磁器や銭貨が出土した。堆積していた土層の観察から、複数回にわたって掘り直されていたことが判明した。底面には鉄分の沈着があることから滞水していたと考えられる。

平右衛門遺跡第3次調査では、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構・遺物を検出し

「まとめ」

が出土した。第11地点第7号溝跡と重複して、掘り込みの浅い近世の第11地点第8号溝跡が検出された。



第15地点 第2号住居跡

たほか、わずかだが旧石器時代の石器、縄文時代の土器等が出土した。

奈良・平安時代の住居跡は遺跡内に広く分布している。古墳時代後期から奈良・平安時代への集落の継続性などの状況が、今後の調査の進展でより明確になることが予想される。

中世以降の遺構は、周辺地域の土地利用や区画等を考える上で極めて重要な成果である。特に、第11地点、第13地点、第15地点からは大溝が検出された。中世館跡の堀の可能性があり、区画などについては、今後の調査で明確になると考えられる。

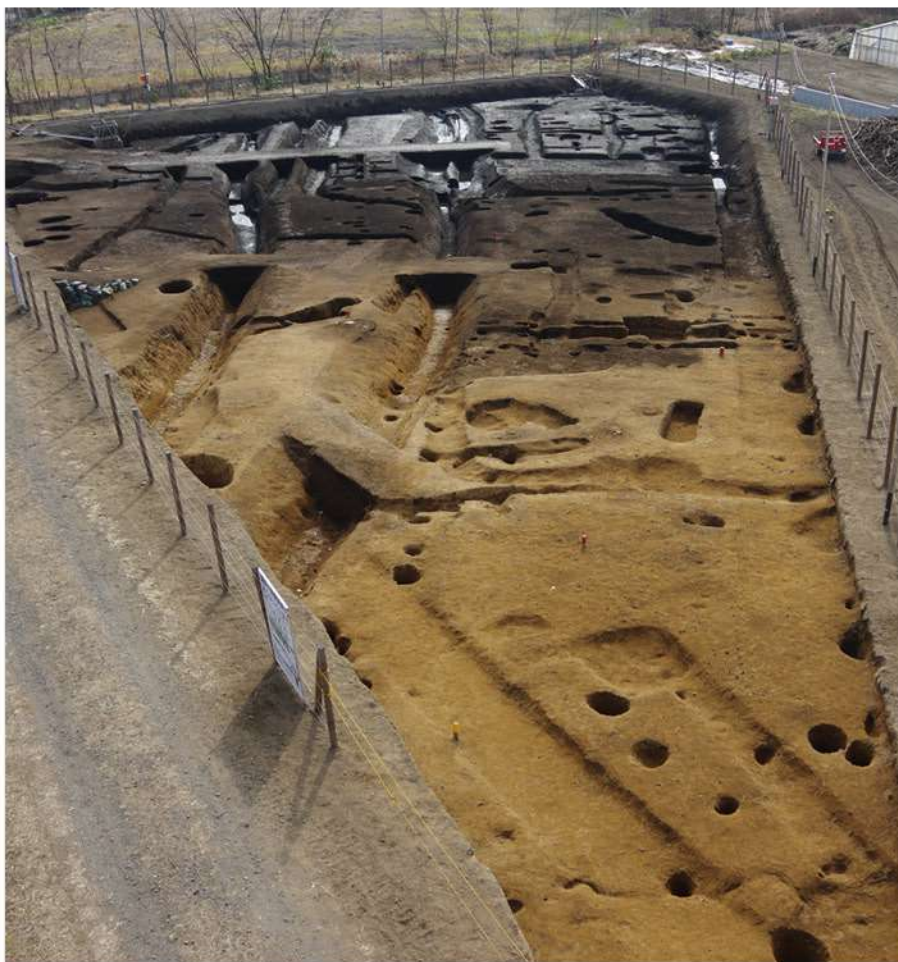
みやまえ 宮前遺跡（第1次） 鴻巣市

「立地と環境」

宮前遺跡は鴻巣市大字宮前字本田に所在する。標高約15mから18mの台地斜面に立地し、南に荒川が南流する。調査区南側は、戦後の造成により平坦な地形となっているが、本来は荒

川によって形成された氾濫平野（低地）であり、近世以前は沼沢地であった。現在も地下から湧水があり、水源として活用されている。

遺跡は昭和51（1976）年に、「古墳から奈良・平安時代の大規模な集落遺跡」として埼玉県重要遺跡に選定されている。



調査区全景

「発見された遺構」

第1次調査では、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構が発見された。

調査区は、北から南方向に大きく傾斜しているため、高所の北側を「台地」、低所の南側を「低地」と呼称した。

各時代の遺構数は、縄文時代の木組遺構5箇所、性格不明遺構1基、遺物包含層1箇所、古墳時代の竪穴状遺構1基、奈良・平安時代の住居跡7軒、土壇9基、ピット22基、遺物包含層1箇所、中・近世の土壇50基、井戸跡3基、溝跡28条、墓跡4基、性格不明遺構1基、ピット70基である。また、台地では縄文時代の住居跡や土壇等が見つかったが、第1次調査ではその分布を確認し、古代以降の遺構と縄文時代の遺物包含層の調査を実施した。なお、旧石器時代の遺物は出土しなかった。

縄文時代

調査区の中央から南側の低地に、遺物包含層が堆積し、包含層中から木組遺構5箇所、性格不明遺構1基が確認された。

遺物包含層からは、土器（深鉢、ミニチュア土器等）、石器（打製石斧、石鏃、剥片等）のほか、堅果類（クルミ）が出土した。

木組遺構は包含層の下層から5箇所に分かれて検出された。最も規模の大きい第1号木組遺構は、長軸約4.3m、短軸約0.3mの細長い木材を南北方向に据えたものである。自然科学

- 所在地
鴻巣市大字宮前字本田336番地
他
- 実施期間(事業者)
令和3年7月～令和4年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
1,900㎡
- 遺跡の種別
集落跡
- 主な遺構
縄文（木組遺構5・性格不明遺構1・遺物包含層1）
古墳（竪穴状遺構1）
奈良・平安（住居跡7・土壇9・ピット22・遺物包含層1）
中・近世（土壇50・井戸跡3・溝跡28・墓跡4・性格不明遺構1・ピット70）

分析の結果、樹種はコナラとされた。性格や機能は今後の検討を要するが、地下水が通る透水層の直上に設置されていることから、低地に下りるための道、あるいは堅果類を水さらし処理する施設の可能性がある。

古墳時代

第1号竪穴状遺構は、調査区中央の低地から、第8号溝跡に壊される形で確認された。長軸約4m、短軸約1.3m以上、深さ約0.2mの浅い楕円形の掘り込で、古墳時代前期後半の土師器が多数出土した。壺、台付甕、高坏が出土し



木組遺構

I 令和三年度に調査をした遺跡

ており、特に高坏が多く出土した。壺や高坏の一部は形を残すものもあるが、多くは細かく破砕された状態で出土した。

奈良・平安時代

台地から住居跡7軒、低地から遺物包含層1箇所等が確認された。

第1、2、5、6号住居跡は、調査区北端に位置し、大半が調査区域外に続いて検出された。互いに重複した状態で確認された。

第3、4号住居跡は、調査区中央西側に位置し、西部は調査区域外に続く。重複した状態で確認され、東側にカマドが設けられていた。第3号住居跡は長軸約4m、短軸約3mである。

第7号住居跡は、調査区北側に位置し、東側や南側を中世の遺構に壊されていた。東側からカマドが見つかったが、第1号溝跡により大半が削平されており、燃焼部の一部のみ確認する



第3、4号住居跡



第1、2号溝跡

ことができた。

いずれの住居跡も住居全体の構造は確認できなかったが、土師器の坏・甕、須恵器の蓋・坏等が出土し、それらの特徴から8世紀後半を中心に建てられたと推定される。須恵器については、埼玉県鳩山町周辺に分布する南比企窯跡群で焼かれた製品が見つかっている。

遺物包含層は低地で確認された。当該期の須恵器や土師器の破片が出土しており、この層を旧表土として、中・近世の遺構の一部が形成されたと判断した。

中・近世

台地から低地にかけて、調査区全体に渡って土壇50基、井戸跡3基、溝跡28条、墓跡4基、性格不明遺構1基、ピット70基が確認された。第1次調査において、最も遺構密度の高かった時代である。

第22、45号土壇は調査区中央で検出された地台式下式坑である。中世の陶磁器類が出土した。

第2、3号井戸跡は、低地で確認された。直径1m前後の小型の井戸である。第2号井戸跡

は円筒状に掘り込まれた素掘りの井戸で、木製の漆境片が出土した。第3号井戸跡は方形状に掘り込まれた井戸で、遺物は少なかったが、木製の漆境片が出土した。年代は、13世紀から14世紀代と推定される。

溝跡は、調査区中央を南北方向に走行する大型の第1、2号溝跡を中心に、見つかった。

第1、2号溝跡は、ほぼ直線的に掘削されている。第1号溝跡は長軸約52m、短軸約2・5mで、地形の傾斜に沿って北から南方向に掘削されている。断面形は地点により異なるが、箱薬研堀や逆台形の掘り込みが認められた。

第2号溝跡は長軸約40m、短軸約2・5mで、第1号溝跡と同様の形態である。この2つの溝跡を中心に、両溝に並走する小型の溝や、東西方向に直交する溝が掘削されている。

溝跡の遺物は、陶磁器、板石塔婆、石臼等が出土した。いずれも破片である。第1号溝跡からは、古瀬戸の天目茶碗、青磁坏・碗（中国龍泉窰、白磁皿、常滑焼甕、内耳鍋、かわらけ、硯等）等が出土した。13世紀から15世紀の特徴をもつ。下層出土遺物が14世紀代、上層出土遺物が15世紀中頃の遺物であることから、14世紀代に掘削され、溝として機能していたと推定される。第2号溝跡では青磁や板石塔婆等が出土した。遺物の年代は第1号溝跡とほぼ同様である。墓跡は、第1号溝跡の西側斜面上から見つかった。

第1号墓跡は、平面がT字形をなし、内部から骨粉と焼土・炭化材が検出されたことから、茶毘跡と推定される。

第4号墓跡は、平面が隅丸長方形で、内部から頭蓋骨や歯牙、

骨片が検出されたが、焼土・炭化材は見つからなかった。この状況から、火葬後に主要な骨を埋葬した墓跡と推定される。内部から銭貨（判読不明）が出土した。

「まとめ」

宮前遺跡第1次調査では、奈良・平安時代の集落跡に加えて、縄文時代や中・近世の遺構が検出された。

縄文時代では、低地から遺物包含層と木組遺構が確認された。出土遺物から、時期は縄文時代後期（約4,000年前）と考えられる。台地では、縄文時代の遺構が確認されている。さいたま市大木戸遺跡や久喜市（旧菖蒲町）小林八束1遺跡から、類似した自然環境下で同時期の遺構群が見つかっている。しかし、鴻巣市内では類例が少なく、縄文時代当時の暮らしを推定することができると新たな資料が見つかったことは重要な発見と言える。

奈良・平安時代については、台地上に住居跡が見つかり、集落が営まれていたことが明らかになった。

中・近世については、溝跡を中心とした様々な遺構が検出された。当地は館や屋敷跡の伝承は残されていないが、大型の第1、2号溝跡の存在は、こうした施設の存在を推定させる重要な成果となった。



溝跡出土板石塔婆

かみしゆく 上宿遺跡（第2地点） 志木市

「立地と環境」

上宿遺跡は志木市上宗岡に所在する。標高約5mの沖積低地に立地し、東に荒川、西に新河岸川及び柳瀬川が流れる。また、南西には標高約20mの武蔵野台地が広がっている。

遺跡は、令和元年度に、第2地点の南側に位置する第1地点を調査した。その結果、平安時代から中・近世の遺構と遺物を検出した。

平安時代（9世紀代）については、竪穴住居跡や井戸跡、溝跡などが見つかり、土師器や須恵器をはじめ、墨書土器などが出土した。中世から近世（16世紀から19世紀）については、



調査区全景（南東から）

大規模な溝跡をはじめ、井戸跡や墓壇、多数の柱穴などが見つかり、陶磁器や板石塔婆等が出土した。

今回の調査に関わる中世から近世の遺跡としては、柏の城跡を含む志木市城山遺跡が挙げられる。柏の城跡の発掘調査で検出された堀跡は、『館村日記』にみえる「柏之城落城後の屋敷割の図」に対応するとみられる。また、鑄造関連の遺構も検出され、大量の鉄滓、鑄型、三又状の土製品、砥石といった鑄造に関する遺物が出土した。

近隣には千光寺（伝、天慶4年（941）創建）や大仙寺（伝、弘治2年（1556）創建）が位置することに加えて、鎌倉街道羽根倉道が通っていたと推定されており、宗岡の地は古くから交通の要衝であったことが窺える。

「発見された遺構」

今回の調査で発見された遺構は、中世から近世にかけての土壇、溝跡、柱穴（ピット）である。

中・近世

検出された5条の溝跡のうち、第1号溝跡と第3号溝跡は南北方向に走行し、規模や堆積土も類似していたことから、同時期に存在したと考えられる。両溝からは、土師器や須恵器、陶磁器が出土した。加えて、第3号溝跡からは板石塔婆の破片が出土し、「八月 □□□」の銘文が認められた。なお、第3号溝跡の南側は、第1地点の第3号溝跡に続き、本来は南北に走行する一連の溝と推定される。

一方、第2号溝跡は、南西から北東方向に走行する。第1、第3号溝跡に壊されていることから、両溝跡以前に造られたと考えられる。出土遺物は土師器や須恵器に限られており、古代に遡る可能性もある。

第5号溝跡は、調査区出入口の両側から確認された。大半が調査区域外に位置するが、南西から北東に走行する大型の溝と推定される。走行方向から、南側の第1地点で検出された第7号溝跡に続く可能性がある。

第1号土壇は、調査区南西隅から検出された。掘り込みの大半が削平されており、わずかに底面を確認することができた。陶磁器や瓦片とともに鉄器や鉄滓が出土したが、鍛冶等の鉄器製作を推定できる痕跡や遺物は見つからなかった。

ピットは、第1号溝跡の西側から1基検出された。分布に規則性は見られず、形態も不統一なことから、建物や柵列等の構造物を推定できるものは確認できなかった。

「まとめ」

上宿遺跡第2地点の発掘調査では、主に中世から近世にかけての遺構と遺物が見つかった。そのうち、第3号溝跡は、第1地点から長く続くことが判明した。また、大型の溝と推定される第5号溝跡が、南西から北東方向に検出された。第1地点における大溝の分布と合わせて考え、当時の土地の区画と区画内の使い方を考える上で重要な発見となった。

また、第1号溝跡や第2号溝跡のように新たな溝跡も検出され、上宿遺跡の土地利用について、その歴史を復元する上で貴重な成果が得られた。

以上、上宿遺跡第2地点の発掘調査によって、中世から近世にかけての宗岡の歴史に関わる大きな成果を得ることができた。



第1号溝跡 遺物出土状況

- 所在地
志木市上宗岡2丁目1231-2
他
- 実施期間(事業者)
令和3年7月～令和3年9月
(埼玉県)
- 調査面積
280.78㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
中・近世(土壇1・溝跡5・ピット12)



東側調査区全景

「立地と環境」
三ノ耕地遺跡は、比企郡吉見町久米田に所在する。標高約15mの自然堤防上に立地し、東に横見川および荒川、西に市野川が流れる。
平成8、9年度に吉見町教育委員会によって第1、2次調査が実施された。第1次調査では、弥生時代の竪穴住居跡や古墳時代前期の方形周溝墓群および前方後方形の墳墓、古墳時代後期の古墳、奈良・平安時代の溝跡、中世の溝跡等が検出された。第2次調査では、縄文時代晩期の水場遺構や同時期の住居跡、古墳時代前期の前方後方形の墳墓などが検出された。このように、さまざまな時代の重要な遺構・遺物が多く見つかっていることから、以前から著名な遺跡であった。

「発見された遺構」
今回の調査で発見された遺構は、奈良・平安時代の土壇、溝跡、中・近世の土壇、井戸跡、溝跡、柱穴（ピット）などである。
検出された16条の溝跡のうち、2条は検出された位置や走行方向、出土遺物などから奈良・平安時代の道路側溝と考えられる。2条検出されたのは掘り返しの結果と考えられた。東側の第30号溝跡では、上層から平安時代（9世紀代）の遺物が出土した。
東山道武蔵路が駅路として機能していたのは、文献史料から宝亀2年（771）までとされ、以後は傳路として用いられたとされる。出土した遺物から、奈良・平安時代を通して道路として利用していたと考えられる。
両溝跡の西側は後世の攪乱によって壊されており、砂利敷の路盤等は検出されなかった。いわゆる生活面が残存する箇所でも路盤の痕跡が認められなかったことから、周辺一帯が削平を受けている可能性がある。また両溝跡は、鎌倉時代以降の第4号井戸跡によって壊されており、その頃には道路としての機能を完全に失っていたと考えられる。



第37号溝跡

- 所在地
吉見町大字久米田字二ノ耕地 367-1
- 実施期間(事業者)
令和3年7月～令和3年12月 (埼玉県)
- 調査面積
1,985.7㎡
- 遺跡の種別
集落跡
- 主な遺構
奈良・平安(土壇2・溝跡16)
中・近世(土壇22・井戸跡4・溝跡30・ピット41)

まれていた。このような平面形態の遺構は、弥生時代からみられるが、本遺構の時期は出土遺物から奈良時代と考えられる。第13号土壇によつて南側の一部が壊されており、同土壇からは残存率の高い奈良時代後半の須恵器の坏が出土したこと、それまでには機能を失つていたと考えられる。須恵器坏の年代観から、溝跡の廃絶時期は、8世紀第Ⅲ四半期と推察され、これは東山道武蔵路が駅路から傳路へとなった宝亀2年(771)に符合している。

このような形状の遺構の類例は乏しく、遺構の性格は不明である。しかし、古代道路跡の側溝と推察される第30、40号溝跡から東に約1.5m離れた箇所に位置し、多角形の一边が両溝跡と並行すること、また時的にも奈良時代前半から中頃の遺構であり、両溝跡と同時期に存在した遺構であることから、本遺構は古代道路跡と関連する施設である可能性が高い。

また覆土中に焼土ブロックが多く含まれていたことから、近くに火を扱う施設の存在が推察され、本遺構と何らかの関連があったと考えられる。

中・近世

中世まで遡ると考えられる遺構は第1、4号井戸跡、第25号溝跡が挙げられる。このうち第4号井戸跡は、覆土上層から鎌倉時代の白磁皿が出土していることから、中世でも古い時期の遺構と考えられる。

第1号井戸跡の下層からは、安土桃山時代頃の天目茶碗の破片が出土しており、中世後半の遺構と考えられる。

第25号溝跡は小規模ながらも掘り込みは深く、鎌倉から室町時代頃の常滑焼の破片や、鎌倉時代の舶載品である青磁の破片が出土した。

この他に、第8号溝跡からは室町時代の常滑焼の破片が出土しており、中世段階の遺構である可能性がある。

中世から近世にかけての遺構は、主に調査区の東側で検出された。

特に調査区中央部の第1号溝跡や東側の第18号溝跡は大規模かつ掘り込みが深いもので、深さは1.5mを越えるものであった。

第1号溝跡の中層からは江戸時代初頭から前半の遺物が比較的多く出土しており、中世末から江戸時代初頭頃に掘削されたと考えられる。また、遺物が多く含まれていた層には掘り拳大の土塊も多く含まれ、この時期に、周辺で比較的大規模な土地造成が行われていた可能性がある。

江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』によると、当遺跡が位置する久米田村は「早損の地」、つまり干害が度々あった土地とされている。第1、18号溝跡などの大規模な溝跡の延長線上には、天神沼や大沼、和名沼などの大規模な農業用溜池が分布する。これらの溜池は『新編武蔵風土記稿』に記載されていることから、少なくとも江戸時代後期には存在していたと考えられる。今回検出された溝跡は、農業用水を引くための用水路であった可能性も考えられる。

この他に、調査区東側の第10号土壇から、底部に「吉見」の刻印が施された江戸時代末期頃の土瓶の破片が出土した。「吉見」の刻印は、以前から川越市の発掘調査などで存在が認知されていた。「吉見」という文字から、吉見町周辺で生産されているのではないかとされてきたが、今回の調査で初めて吉見町内から出土した。生産地はいまだに不明だが、吉見町周辺でも流通している状況を捉えることができた。

「まとめ」

奈良・平安時代は、古代道路跡の側溝と考えられる溝跡が検出され、古代道路跡に付属する

施設の可能性がある多角形の周溝状遺構を確認した。特に多角形の周溝状遺構の廃絶時期は、東山道武蔵路が駅路から傳路となった時期と符合しており、古代道路跡が東山道武蔵路であれば、駅路としての機能に関連した施設であった可能性はある。これらは西吉見条里Ⅱ遺跡や、三ノ耕地遺跡第1次調査で見つかった古代道路跡の性格を考える上で、重要な発見となった。

中・近世では、大規模な溝跡が数条確認された。溝跡の性格は不明だが、その規模や走行方向から用水路であった可能性がある。

また、鎌倉時代から江戸時代まで、さまざまな時期の遺物が出土したことから、中世以降も継続的に開発が行われていた土地であったことがわかった。

このように調査によって、奈良・平安時代から江戸時代にかけての、多岐にわたる貴重な成果を得ることができた。



第30、40号溝跡



第10号土壇 出土遺物刻印



調査区全景

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、土壇1基、溝跡2条を検出した。第2号住居跡は、南半部を攪乱によって壊されていた。東壁付近から焼土が検出されており、東にカマドが設けられていたと推定される。出土した須恵器坏から、奈良時代中頃の住居跡と考えられる。第3号住居跡は調査区東端から、西壁の一部のみが検出された。覆土の東寄りに焼土が多く含まれており、北壁または東壁にカマドが設けられていたと考え



第2号住居跡

奈良時代中頃の第2号住居跡からは、須恵器の坏や甕、土師器の甕などが出土した。須恵器は現在の鳩山町付近に分布する南比企窯跡群で生産された製品が多く認められ、寄居町末野付近に分布する末野窯跡群で生産されたものも少量が含まれていた。平安時代前半の第3号住居跡からは、須恵器の坏や高台付坏、蓋、甕、土師器の甕や小型台付甕等が出土した。須恵器は寄居町の末野窯跡群で生産されたものが主体であった。

とみたこうしんづか
富田庚申塚遺跡(第8次) 寄居町

「立地と環境」

富田庚申塚遺跡は、寄居町大字富田に所在する。遺跡は、外秩父山地を臨む江南台地上に立地する。周辺には、東に福泉坊遺跡、北西に赤浜遺跡と峯ヶ谷戸遺跡があり、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての遺跡が分布する。遺跡は、寄居町教育委員会・同遺跡調査会、

当事業団によって7度の発掘調査が実施されている。北側に隣接する第7次調査区では、平安時代の竪穴住居跡や縄文時代の遺物包含層などが検出された。

「発見された遺構」

今回の調査で発見された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡、土壇、溝跡、近世の溝跡などである。

古墳時代

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡1軒を検出した。住居跡は後世の溝跡等によって大きく破壊されていた。遺物は、土師器甕や高坏の破片が少量出土した。土器の特徴から古墳時代前期と考えられる。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、土壇1基、溝跡2条を検出した。第2号住居跡は、南半部を攪乱によって壊されていた。東壁付近から焼土が検出されており、東にカマドが設けられていたと推定される。出土した須恵器坏から、奈良時代中頃の住居跡と考えられる。第3号住居跡は調査区東端から、西壁の一部のみが検出された。覆土の東寄りに焼土が多く含まれており、北壁または東壁にカマドが設けられていたと考え

近世

近世の遺構は出土遺物が少ないため、詳細な時期が特定できる遺構は無かった。また中世まで遡る遺物も認められなかった。

られる。覆土から出土した緑泥片岩は、全体が被熱しており、カマドの構築材として使用されたものと推定される。出土した遺物の多くは9世紀中頃であることから、平安時代前半の住居跡と考えられる。また、第2号住居跡の西側から、ピットが長方形に並んで検出された。遺物は出土していないが、奈良時代の住居跡と近接して位置すること、軸方向が第2号竪穴住居跡と揃うことから、奈良時代の掘立柱建物跡の可能性が残る。

「まとめ」

古墳時代では、古墳時代前期の竪穴住居跡が1軒検出された。過去の調査では、遺跡から古墳時代前期の遺構等は検出されていない。今回、古墳時代前期の住居跡が調査区の東端部で検出されたことから、未調査である東側へ集落が展開していた可能性が考えられる。

奈良・平安時代では、奈良時代中頃と平安時代前半の住居跡がそれぞれ1軒ずつ検出され、これまで調査された同時期の集落の広がりを確認することができた。

奈良時代中頃の第2号住居跡からは、須恵器の坏や甕、土師器の甕などが出土した。須恵器は現在の鳩山町付近に分布する南比企窯跡群で生産された製品が多く認められ、寄居町末野付近に分布する末野窯跡群で生産されたものも少量が含まれていた。

平安時代前半の第3号住居跡からは、須恵器の坏や高台付坏、蓋、甕、土師器の甕や小型台付甕等が出土した。須恵器は寄居町の末野窯跡群で生産されたものが主体であった。

- 所在地
寄居町大字富田270番地他
- 実施期間(事業者)
令和4年1月~令和4年3月
(埼玉県)
- 調査面積
586 m²
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
古墳(住居跡1)
奈良・平安(住居跡2・土壇1・溝跡2)
近世(溝跡5)
時期不明(土壇16・溝跡6・ピット49)

越谷警察署前遺跡 (第1次) 越谷市

「立地と環境」

越谷警察署前遺跡は埼玉県南東部の越谷市東越谷に所在する。東武伊勢崎線越谷駅から北東へ約1.7kmである。遺跡は中川低地のなかの元荒川によって形成された自然堤防上に立地し、標高は約4mである。

越谷市では現在19箇所の遺跡が確認されている。最古とされているのは、増林中妻遺跡で、平成29年に遺跡確認調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土している。古墳時代後期では見田方遺跡がある。竪穴住居跡が2軒検出され、土師器、須恵器の他、土錘、土玉、石製紡錘車等が出土している。奈良・平安時代の遺跡は、大道遺跡で平安時代の住居跡や、土器焼成遺構等を検出している。

中世の遺跡は市内3遺跡と少ないが、板石塔婆が約130基確認されており、未知の遺跡の存在を窺わせる。

近世の越谷(越ヶ谷)は日光道中三番目の宿場として栄え、慶長9年(1604)には、徳川家康の求めにより越ヶ谷御殿が建てられた。明暦3年(1657)の大火で江戸城が焼失した際、將軍の居城として江戸城二の丸に移された後は畑地となったとされている。越ヶ谷御殿跡の発掘調査では、16世紀に埋没したと考えられる土壇や井戸跡、溝跡等を検出している。遺跡の所在する東越谷は、昭和46年に区画整理に伴う町名変更による地名で、越ヶ谷・花田、瓦曾根、東小林の各一部を編入して成立している。遺跡は東小林村にあたり、明治12年までは小林村であった。

「発見された遺構」

調査は、調査区を2区画に分け、前半を西側調査区、後半を東側調査区として調査を行った。発見された遺構は、奈良・平安時代の土壇、近世の土壇、井戸跡、畝状遺構、ピットである。

「まとめ」

奈良・平安時代
土壇1基を検出した。第11号土壇は、調査区東端で確認した。1.0×0.8mの不整形で、深さは約0.3mであった。覆土には大型の焼土塊や焼土粒子が多く含まれ、平安時代の須恵器や土師器製の破片が出土した。

近世
土壇11基、井戸跡2基、畝状遺構12条、ピット3基が検出された。
第1号土壇は1.3×1.0mの楕円形で、深さは約0.3mである。底面からは第8号土壇が検出された。18世紀中ごろの陶磁器が出土した。第12号土壇は第11号土壇の一部を壊していた。2.3×1.5mの長方形で、深さは約0.25mである。18世紀末から19世紀初頭の陶磁器片や焙烙が出土した。

第1号、第2号井戸跡は西側調査区で近接して検出された。第1号井戸跡は直径約1.5mの円形、第2号井戸跡は直径約1.3mの不整形円形である。17世紀後半から18世紀前半の陶磁器が出土した。

畝状遺構は西側調査区で検出した。東西方向に走るものが多く、少ないが直交するものもあった。

- 所在地
越谷市東越谷7丁目11-6他
- 実施期間(事業者)
令和3年10月～令和3年12月(埼玉県)
- 調査面積
783.20㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
奈良・平安(土壇1)
近世(土壇11・井戸跡2・畝状遺構12・ピット37)



西側調査区全景



第1、8号土壇

調査では、奈良・平安時代と近世の遺構と遺物が見つかった。平安時代の第11号土壇からは、9世紀代の須恵器や土師器製が出土した。周辺が平安時代には生活域となっていたことが明らかで、貴重な発見となった。

近世の第1号土壇と第12号土壇からは、18世紀中ごろから19世紀初頭の陶磁器や焙烙等が出土した。第1号、第2号井戸跡からは17世紀後半から18世紀前半の陶磁器が出土した。日光道中越ヶ谷宿からやや離れた地点にも近世の生活の跡が存在したことは、大きな成果となった。



第1号住居跡

時代の竪穴住居跡や、中世の土壇、井戸跡、溝跡、焼土跡、ピット、かわらけ溜り、遺物包含層などである。

奈良・平安時代

竪穴住居跡3軒を調査した。第1号住居跡と第2号住居跡は重複して検出され、第3号住居跡はカマドのみが確認された。第1号住居跡は、東壁にカマドが検出された。カマドは一度壊れてから造り替えていることが確認できた。遺物から時期は10世紀前半と考えられる。

中世

土壇18基、井戸跡1基、溝跡5条、焼土跡1基、ピット194基、かわらけ溜り1箇所、遺物包含層2箇所が検出された。

遺物包含層は、北側と西側の2箇所に分かれて確認された。北側からは、かわらけの破片などが検出された。包含層の下からは、かわらけ溜りが1箇所検出された。かわらけ溜りからは、かわらけの完形品や破片など100点以上が出土したほか、在地産の播鉢や甕などが出土した。時期は、15世紀後半と考えられる。

西側の包含層からは、かわらけ、在地産の鉢、青磁、白磁の破片、炉壁、鉄滓などが出土した。包含層の下からは、溝跡が検出された。溝跡は、第1〜3号溝跡が南北方向、第4号溝跡が東西方向に検出された。第1、2号溝跡からは15世紀代の遺物が出土した。

溝跡によって区画された内側からは、建物の柱穴跡とみられるピット群、井戸跡、かわらけ溜り、焼土跡などが検出された。

検出された井戸跡の平面形は円形で、直径は約1.2mであった。素掘りの井戸で、覆土上層からかわらけが集中して出土した。かわらけには鉄滓が混在していた。中層からは、白磁皿の破片が出土した。出土遺物の時期は、14世紀から15世紀代であった。

焼土跡は、焼土が約10cm堆積し下層から、かわらけの破片が出土した。

まとめ

調査区内からは、奈良・平安時代の集落跡と、中世の遺構が確認された。

奈良・平安時代の竪穴住居跡は、中世の遺構に壊されているものが多かった。第1号住居跡のカマドは、東壁に設けられていた。出土遺物から、10世紀前半を主体としている。

中世の遺構は、第1〜4号溝跡によって区画された内側から、多く検出された。鉄滓や炉壁などの遺物が出土したことから、居住空間だけではなく、鍛冶などの作業空間であった可能性も考えられる。

多量に出土したかわらけは、口径10cm以下、器高3cm未満の小型のものが主体であった。口径12〜14cm、器高5cmほどの大型のものは、わずかに検出された。色調は橙色や暗褐色であった。底部の外面には糸切り痕が明瞭に残され、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形であった。このような特徴のかわらけは、15世紀後半に本庄市に築かれたとされる五十子陣に関連する、東五十子赤坂遺跡や東五十子遺跡、



第1号かわらけ溜り 遺物出土状況

「**立地と環境**」

東本庄遺跡は、西側に位置する大久保山の丘陵裾部に連なる微高地上に立地し、標高は約54・9mである。

遺跡は、平成13年度、平成15年度に本庄市教育委員会が本庄総合公園の拡張整備に伴ない発掘調査を行った。そのうち平成13年度の調査では、中世のかわらけが多量に出土した土壇や建物跡の柱穴跡、溝跡、井戸跡などが検出された。中世の館跡と推測されている。

「**発見された遺構**」

今回の調査で発見された遺構は、奈良・平安

時代の竪穴住居跡や、中世の土壇、井戸跡、溝跡、焼土跡、ピット、かわらけ溜り、遺物包含層などである。

奈良・平安時代

竪穴住居跡3軒を調査した。第1号住居跡と第2号住居跡は重複して検出され、第3号住居跡はカマドのみが確認された。第1号住居跡は、東壁にカマドが検出された。カマドは一度壊れてから造り替えていることが確認できた。遺物から時期は10世紀前半と考えられる。

中世

土壇18基、井戸跡1基、溝跡5条、焼土跡1基、ピット194基、かわらけ溜り1箇所、遺物包含層2箇所が検出された。

遺物包含層は、北側と西側の2箇所に分かれて確認された。北側からは、かわらけの破片などが検出された。包含層の下からは、かわらけ溜りが1箇所検出された。かわらけ溜りからは、かわらけの完形品や破片など100点以上が出土したほか、在地産の播鉢や甕などが出土した。時期は、15世紀後半と考えられる。

西側の包含層からは、かわらけ、在地産の鉢、青磁、白磁の破片、炉壁、鉄滓などが出土した。包含層の下からは、溝跡が検出された。溝跡は、第1〜3号溝跡が南北方向、第4号溝跡が東西方向に検出された。第1、2号溝跡からは15世紀代の遺物が出土した。

溝跡によって区画された内側からは、建物の柱穴跡とみられるピット群、井戸跡、かわらけ溜り、焼土跡などが検出された。

調査区内からは、奈良・平安時代の集落跡と、中世の遺構が確認された。

奈良・平安時代の竪穴住居跡は、中世の遺構に壊されているものが多かった。第1号住居跡のカマドは、東壁に設けられていた。出土遺物から、10世紀前半を主体としている。

中世の遺構は、第1〜4号溝跡によって区画された内側から、多く検出された。鉄滓や炉壁などの遺物が出土したことから、居住空間だけではなく、鍛冶などの作業空間であった可能性も考えられる。

多量に出土したかわらけは、口径10cm以下、器高3cm未満の小型のものが主体であった。口径12〜14cm、器高5cmほどの大型のものは、わずかに検出された。色調は橙色や暗褐色であった。底部の外面には糸切り痕が明瞭に残され、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形であった。このような特徴のかわらけは、15世紀後半に本庄市に築かれたとされる五十子陣に関連する、東五十子赤坂遺跡や東五十子遺跡、

東五十子台遺跡などから出土したかわらけと類似していた。

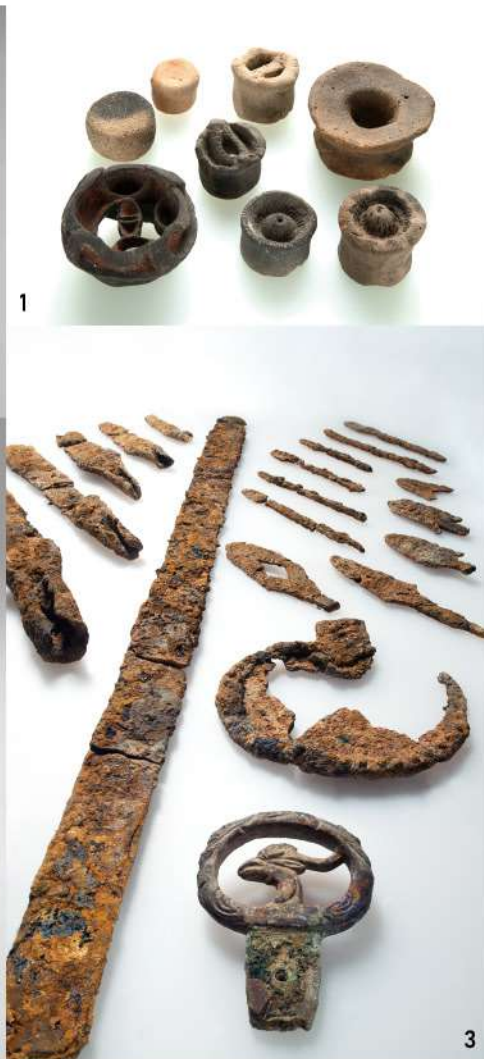
本遺跡の西側には、土壇や溝が残る栗崎館跡が、所在している。館の年代は、12世紀後半ごろと推定されている。今年度の調査では、その時期の遺物が出土していないが、本庄市の調査では同時期の遺物が検出されており、関連について今後の調査で明らかになると考えられる。

ひがしほんじょう
東本庄遺跡 (C地点1次) 本庄市

- 所在地
本庄市大字北堀東本庄116-1他
- 実施期間(事業者)
令和4年1月~令和4年3月(埼玉県)
- 調査面積
1710.24㎡
- 遺跡の種別
集落跡
- 主な遺構
奈良・平安(住居跡3)
中世(土壇18・井戸跡1・溝跡5・焼土跡1・ピット194・かわらけ溜り1・遺物包含層2)

II 令和三年度に刊行された報告書

発掘調査された遺跡の成果は、調査報告書としてまとめられます。その際にはバラバラに出土した破片を復元して元の形にするなどの地道な作業をします。これら一連の作業を「整理」と言い、調査報告書を刊行し、調査は終了となります。今年度は8冊の調査報告書を刊行しました。



1 476 集『小林八束1遺跡Ⅳ』

2 473 集『栗橋宿跡Ⅵ』

3、4 477 集『北大竹遺跡』

4 (資料所蔵・写真提供 埼玉県教育委員会)

令和3年度 刊行報告書



■ 471 集	『本田遺跡』 (加須市)	首都圏氾濫区域堤防強化対策における埋蔵文化財発掘調査報告
■ 472 集	『古里古墳群 清水支群』 (嵐山町)	嵐山郷独身宿舎B3棟改修工事(嵐山郷遺跡埋蔵文化財発掘調査整理等作業及び発掘調査報告書刊行業務委託)埋蔵文化財発掘調査報告
■ 473 集	『栗橋宿跡Ⅵ』 (久喜市)	首都圏氾濫区域堤防強化対策における埋蔵文化財発掘調査報告
■ 474 集	『栗橋宿跡Ⅶ』 (久喜市)	首都圏氾濫区域堤防強化対策における埋蔵文化財発掘調査報告
■ 475 集	『宮西Ⅱ/宮東Ⅱ』 (加須市)	首都圏氾濫区域堤防強化対策における埋蔵文化財発掘調査報告
■ 476 集	『小林八束1遺跡Ⅳ』 (久喜市)	総合給付金(河川)工事(小林調節池)埋蔵文化財発掘調査報告
■ 477 集	『北大竹遺跡』 (行田市)	行田富士見工業団地拡張地区産業団地整備事業埋蔵文化財発掘調査報告
■ 478 集	『越谷警察署前遺跡』 (越谷市)	越谷警察署仮設庁舎建設工事(越谷警察署前遺跡(No.78-016)埋蔵文化財発掘調査業務委託)埋蔵文化財発掘調査報告

Ⅲ 発掘資料の保存と活用

1 保存・活用事業（埼玉県収蔵埋蔵文化財保存活用業務委託事業）

一 資料の管理



出土品の写真撮影



測量図面の整理

- ・ 出土品の写真撮影 2,500 点
- ・ 出土品のデータ作成 2,500 点
- ・ 写真整理台帳の作成 33,611 コマ
- ・ 実測図整理台帳の作成 3,368 枚
- ・ カラースライドの複製作成（フォトDVD）800 コマ

三 情報収集



図書室

- ・ 県内外の埋蔵文化財に関する情報収集（博物館、教育委員会発行物、現地資料等） 491 件
- ・ 図書の収集・整理保管（県教委受入図書の整理、収納） 310 点
- ・ 図書データ作成（内訳：県教委 176、収蔵施設 134、事業団 1,924 冊） 2,234 冊
- ・ 資料室利用者等への対応（随時） 141 人
- ・ 研究・学習等支援 92 人

二 保存処理



出土金属製品の樹脂含浸処理



出土木製品の PEG 含浸処理

- ・ 出土金属製品の保存処理 300 点
- ・ 出土木製品の保存処理 320 点

四 印刷物の刊行・配布



『埋文さいたま』第 65 号
特集：埴輪男子

- ・ 学習用キットカタログの作成 2,500 部
- ・ 埋蔵文化財ニュース（『埋文さいたま』第 65 号） 6,000 部
- ・ 遺跡見学会資料の作成（参加者用 1,000 部×2回） 2,000 部

五 出前授業「古代から教室へのメッセージ」

遺跡から出土した土器や石器、埴輪などを小中学校の学習用教材として活用しています。ふだん発掘調査等に従事している専門職員が、埼玉県内から出土した本物の土器や石器、埴輪などを持参して授業を行います。



令和3年度「古代から教室へのメッセージ」実施校一覧（40校）

1	4/28 (水)	さいたま市立芝川小学校	15	6/7 (月)	熊谷市立玉井小学校	29	6/28 (月)	行田市立太田東小学校
2	4/30 (金)	三芳町立藤久保小学校	16	6/8 (火)	東松山市立松山第二小学校	30	6/29 (火)	草加市立八幡小学校
3	5/11 (火)	三郷市立鷹野小学校	17	6/9 (水)	三郷市立彦糸小学校	31	6/30 (水)	川口市立戸塚綾瀬小学校
4	5/14 (金)	狭山市立柏原小学校	18	6/10 (木)	川島町立つばさ北小学校	32	7/1 (木)	小鹿野町立長若小学校
5	5/18 (火)	三郷市立後谷小学校	19	6/11 (金)	三郷市立新和小学校	33	7/2 (金)	越谷市立出羽小学校
6	5/19 (水)	三郷市立幸房小学校	20	6/14 (月)	桶川市立桶川西中学校	34	7/5 (月)	杉戸町立高野台小学校
7	5/20 (木)	深谷市立花園中学校	21	6/15 (火)	三郷市立立花小学校	35	7/6 (火)	川口市立領家小学校
8	5/25 (火)	川口市立戸塚東小学校	22	6/16 (水)	草加市立谷塚小学校	36	7/8 (木)	行田市立行田中学校
9	5/28 (金)	春日部市立宮川小学校	23	6/17 (木)	久喜市立小林小学校	37	7/13 (火)	上里町立七本木小学校
10	5/31 (月)	北本市立北小学校	24	6/18 (金)	熊谷市立吉見小学校	38	9/1 (水)	三郷市立瑞木小学校
11	6/1 (火)	久喜市立栗橋西中学校	25	6/22 (火)	桶川市立加納小学校	39	9/7 (火)	行田市立北河原小学校
12	6/2 (水)	美里町立松久小学校	26	6/23 (水)	小鹿野町立三田川小学校	40	2/1 (火)	入間市立扇小学校
13	6/3 (木)	三郷市立前間小学校	27	6/24 (木)	深谷市立八基小学校			
14	6/4 (金)	加須市立種足小学校	28	6/25 (金)	深谷市立深谷西小学校			

『学習用キットカタログ』
各キットの内容を紹介しています。



運びやすく梱包した学習用キットを無料で貸出しています。地域別・テーマ別など、約120セットの中から選べます。社会科や図工の教材として、あるいは地域の郷土学習の資料として、ご利用ください。参考パネルや体験用の火おこしセットなども用意しています。

六 学習用キットの貸出し

学習用キットの貸出し（令和3年度）

401セット

Ⅲ 発掘資料の保存と活用

2 その他の事業

一 遺跡見学会

発掘調査で得られたさまざまな成果や出土遺物をいち早く
 県民の皆さまにお伝えするため、発掘途中の遺跡の様子や、
 出土した遺物などを調査担当者が分かりやすく説明し、疑問
 や質問にもお答えします。
 土の中に埋もれていた身近な歴史に触れてみてはいかがでしょうか。



第1回
 令和3年
 9月26日(日)
 北2丁目陣屋跡
 (久喜市)
 見学者105人
 (埼玉県業務委託事業)



第2回
 令和3年
 11月28日(日)
 三ノ耕地遺跡
 (吉見町)
 見学者81人



第3回
 令和3年
 12月19日(日)
 平右衛門遺跡
 (鴻巣市)
 見学者103人



第4回 令和4年2月6日(日) 宮前遺跡(鴻巣市)は、新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置に関する公示(令和4年1月7日~3月21日まで)のため中止



■ ほるとま展 2021「動物のはにわ」

1	モラージュ菖蒲（久喜市）	令和3年10月23日（土）・24日（日）	見学者：2,763人
2	ららぽーと富士見（富士見市）	令和3年11月6日（土）・7日（日）	見学者：2,338人
3	そごう大宮店（さいたま市）	令和3年12月4日（土）・5日（日）	見学者：3,816人
4	さきたま史跡の博物館（行田市）	令和3年12月11日（土）～令和4年2月6日（日）	見学者：6,073人
5	ティアラ21（熊谷市）	令和4年2月19日（土）・20日（日）	見学者：1,065人

ヒストリーロード見学



収蔵庫探検ツアー



■ 令和3年「県民の日まいぶんフェスタ」

埼玉県文化財収蔵施設	令和3年11月14日（日・県民の日）	来場者：102人
------------	--------------------	----------

四 さきたま史跡の博物館との共同展示

令和3年度最新出土品展「地中からのメッセージ」	会場：さきたま史跡の博物館 企画展示室 共催：さきたま史跡の博物館・埼玉考古学会	令和3年10月9日（土）～ 令和3年11月21日（日）	来場者：10,151人
-------------------------	---	--------------------------------	-------------

五 遺跡報告会の開催

第53回遺跡発掘調査報告会 埼玉考古学会・埼玉県埋蔵文化財調査事業団・ さきたま史跡の博物館	会場：さきたま史跡の博物館	開催日：未定	中止
--	---------------	--------	----

六 公開考古学講座

令和3年度ほるとま考古学セミナー	テーマ：「栗橋宿と町の鎮守」 会場：久喜市栗橋文化会館イリス	令和4年1月29日（土）	中止
------------------	-----------------------------------	--------------	----

Ⅲ 発掘資料の保存と活用

七 印刷物等			
展示解説パンフレット	ほるとま展 2021	発行：令和 3 年 10 月 20 日	4,000 部
展示解説パンフレット	ほるとま展 2021（さきたま史跡の博物館）	発行：令和 3 年 12 月 11 日	1,000 部
講座・講演会資料	ほるとま考古学セミナーレジュメ	発行：令和 4 年 1 月 29 日	500 部
発掘情報チラシ		発行：随時	
年報	「さいたま埋文リポート 2021」（年報 41）	発行：令和 3 年 8 月 10 日	2,000 部
研究紀要	「研究紀要」第 36 号	発行：令和 4 年 3 月 17 日	500 部

八 研修等の受入れ		
加須げんきプラザ 職員研修	令和 3 年 10 月 18 日（月）	4 人受入
埼玉雑学大学 施設見学	令和 3 年 11 月 18 日（木）	22 人受入
吉見町立西ヶ丘小学校 社会科見学	令和 3 年 12 月 7 日（火）	11 人受入
鴻巣市箕田公民館「箕田歴史探訪」	令和 4 年 2 月 13 日（日）	中止
インターンシップ（埼玉大・早稲田大・國學院大）	令和 3 年 8 月 16 日（月）～ 8 月 27 日（金）	5 人受入
One Day インターンシップ	令和 3 年 11 月 24 日（水）～ 11 月 26 日（金）	21 人受入
One Day インターンシップ	令和 4 年 3 月 3 日（木）～ 3 月 4 日（金）	21 人受入

九 講師等の派遣			
ほるとま展 2020 関連講座	演題：「出土木製品からみた栗橋宿の暮らし」 会場：さきたま史跡の博物館	令和 3 年 4 月 20 日（火） （オンライン公開）	175 人視聴
ほるとま展 2021 関連講座	演題：「動物のはにわ」 会場：さきたま史跡の博物館	令和 3 年 12 月 18 日（土）	25 人受講
ほるとま展ガイドツアー	会場：さきたま史跡の博物館	令和 3 年 12 月 12 日（日）	中止
テーマ展関連講座	演題：「新屋敷遺跡から見た古墳のまつり」 会場：さきたま史跡の博物館	令和 4 年 2 月 26 日（土） （オンライン公開）	30 人視聴

十 その他			
文化庁主催「発掘された日本列島 2021」	展示解説他 会場：東京都江戸東京博物館	令和 3 年 6 月 5 日（土）～ 7 月 4 日（日）	2 人派遣
全埋協関東ブロック 関東考古学フェア スタンプラリー		9 月～ 11 月（期間短縮）	不参加
全埋協関東ブロック「発掘された関東の遺跡 2021」	遺跡発表会 会場：未定	開催日：未定	中止
東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団 普及連携事業公開セミナー	令和 2 年度延期開催 テーマ：「方形周溝墓を考える」 会場：東京都江戸東京博物館	令和 3 年 10 月 2 日（土）	来場者： 154 人
	令和 3 年度 テーマ：「古墳時代後期から終末期にか けての様相を探る」 会場：神奈川県川崎市宮前市民会館	令和 4 年 1 月 22 日（土）	中止
事業団オリジナルグッズの企画・製作			
SNS による遺跡見学会等の各種情報提供	ツイッターフォロワー総数：1,031 人	令和 3 年度ツイート数：25 回	
	LINE 登録総数：74 人	令和 3 年度発信数：2 回	

十一 研究及び研究支援等		
研究・学習等支援	令和 3 年 6 月～令和 4 年 2 月	92 人受入



IV 事業団の概要

1 設立の趣旨と目的

古くから多くの人々が生活を営んできた埼玉県の地には、先人の生活の足跡をものがたる埋蔵文化財が数多く残されています。これらの文化財は、郷土埼玉の歴史を解明する上で必要不可欠な資料であるとともに、貴重な文化遺産でもあります。これを保護し後世に伝えることは、今日の我々の責務であると言えます。

一方において、県内経済の安定成長を確保し、県民生活の向上を図るため、各種開発が盛んに実施されており、その事業が埋蔵文化財の包蔵地に及ぶことも少なくありません。そうした場合には、緊急に発掘調査等の保護措置を講ずることが必要です。

埋蔵文化財の保護と県土の開発の調和を図るためには、文化財保護法の定める精神を基本理念として、公共開発に適切に対処していくことが重要です。

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団は、こうした趣旨の下で、県内の埋蔵文化財の調査・研究、記録保存を行うとともに、埋蔵文化財の保護思想の啓発と普及を図ることを目的として、昭和五十五年に埼玉県の出資により設立されました。

2 略沿革

昭和五十五年四月 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団設立。事務所を県パンピル（浦和市岸町7-6-13）内に置く。

2部4課制、役員11名（理事9、監事2）、事務局員32名。

昭和五十七年四月 事業団本部事務所を大宮市櫛引町2丁目499番地に移転。2部5課制、役員12名（理事10、監事2）、事務局職員52名。

昭和六十二年四月 大里整理事務所開設（大里郡大里村箕輪）。

平成元年十月 事業団本部事務所が大里郡大里村大字箕輪字船木8-13に移転。

平成二年四月 埼玉県立埋蔵文化財センター設立に伴い、事業団本部事務所の所在地を同センター内に置く（大里郡大里村大字箕輪字船木884番地）。

平成三年八月

大宮整理事務所を大宮市東大成町2丁目557番地5に設置。

3 組織の概要

平成十年六月

大里村の区画整備事業に伴い、事業団本部の住所表示を大里郡大里村船木台4丁目4番地1に変更。

平成十二年三月

大宮整理事務所廃止。

平成十四年四月

大里村の町制施行により、大里町となる。

平成十七年十月

市町村合併により、事業団本部の住所表示が熊谷市船木台4丁目4番地1に変更。

平成十八年四月

埼玉県立埋蔵文化財センター廃止により、施設名称が埼玉県文化財収蔵施設となる。事業団本部事務所の所在地を同施設内に置く。

平成二十四年四月

公益財団法人に移行する。

(1) 事業

① 埋蔵文化財の発掘調査・記録作成
② 埼玉県教育委員会から委託された保存活用業務による資料保存・普及事業

③ 県内遺跡等埋蔵文化財の調査研究
④ 埋蔵文化財保護思想の啓発と普及

(2) 設立年月日
(3) 出資者

昭和五十五年四月一日
埼玉県

(4) 基本財産

1,000万円
埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1

(5) 事務所所在地
(6) 組織図及び人員

① 評議員 総数5名（非常勤）
② 役員 総数11名（常勤2名、非常勤9名）



IV 事業団の概要

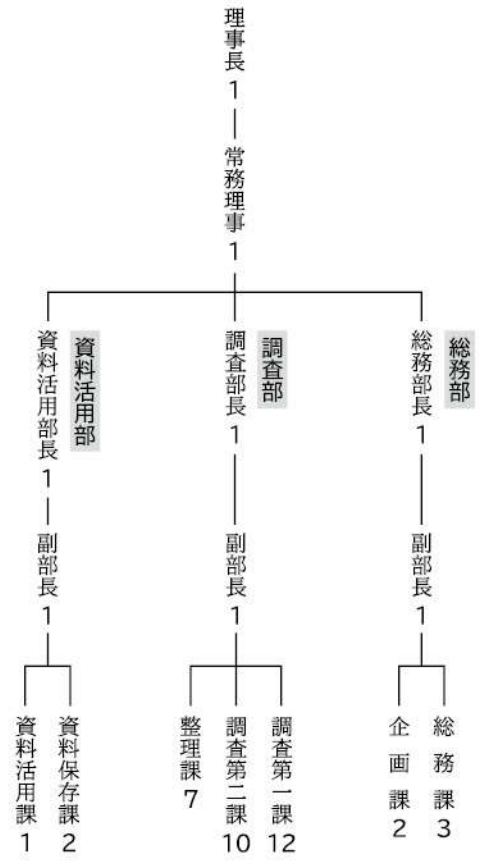
(7) 評議員及び職員名簿

評議員

- 新井 彰 (元学校給食会理事長)
- 志賀 周子 (NPO法人親学推進ネットワークの才代表理事)
- 青木 孝夫 (総合教育センター所長)
- 小倉 均 (埼玉考古学会会長)
- 蛭川 俊也 (蛭川公認会計士事務所会計士)

役員

- 理事長 依田 英樹 (埼玉県派遣)
- 常務理事 小寺 均 (埼玉県派遣)
- 理事 銭場 正人 (元歴史と民俗の博物館館長 現さいたま文学館館長)
- 理事 田部井 功 (元浦和西高校校長 元武南高校校長)
- 理事 笹森 紀己子 (埼玉県文化財保護協会監事)
- 理事 鎌倉 佐保 (東京都立大学教授)
- 理事 秋本文子 (羽生市教育委員会教育長)
- 理事 藤間 憲一 (株式会社オキナヤ代表取締役会長 熊谷商工会議所名誉会長)
- 監事 花川 貴香 (埼玉県文化団体連合会・貴香会代表)
- 監事 寺内 紀代 (元埼玉県公立高等学校事務長会北部地区会長)
- 監事 原口 博 (原口公認会計士事務所公認会計士)



事務局職員

- 総務部長 山本 靖
- 調査部長 田中 広明
- 資料活用部長 上野真由美
- 総務部副部長 福田 聖
- 調査部副部長 渡辺 清志
- 資料活用部副部長 栗岡 潤
- 総務課長 横田千枝子
- 主任 福地 大介
- 主任 山口 里歩
- 主任 平尾 勇樹
- 主任 青木 弘
- 主任 加藤 隆則
- 主任 大屋 道則
- 主任 渡邊理伊知
- 主任 魚水 環
- 主任 富田 和夫
- 主任 大塚 邦明
- 主任 入江 直毅
- 主任 飯塚 真人
- 主任 平田 重之
- 主任 儘田めぐみ
- 主任 手島実実子
- 主任 鈴木 顕房
- 主任 堀内 紀明
- 主任 滝澤 誠
- 主任 赤熊 浩一
- 主任 岩瀬 譲
- 主任 高橋 一生
- 主任 森 敏彰
- 主任 小澤 守
- 主任 吉野 雅彦
- 主任 松崎 光伸
- 主任 三橋 友暁
- 主任 村山 卓
- 主任 桑原安須美
- 主任 砂生 智江
- 主任 黒坂 禎二
- 主任 水村 雄功
- 主任 古間果那子
- 主任 藤田 香織
- 主任 矢部 瞳
- 主任 瀧瀬 芳之
- 主任 井上 真帆



さいたま埋文レポート 2022 年報 42 (令和 3 年度版)

令和 4 年 8 月 31 日発行

編集・発行 **公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団**

〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1

TEL 0493 (39) 3955 FAX 0493 (39) 3579



<https://www.saimaibun.or.jp>